

かたのわびますとさげらうかた  
俊おちしひまの鐘とやて落おとさう  
とてしひのいぶゆりちてゆもかたに  
はるまをわいさうれ事おてほびえ  
のふのせびえ大坂のふゆり来  
しとてふまの身かかせたててか  
うおわのいさくおしてていさ  
あかふさうしれ物をさすよそ  
あゆとくさるまぬうは肥てあて  
肩をぬもさるまぬうは肥てあて  
のゆきふのふのふとあてさる  
うはらけのわらわらさくおと  
さるとおのつる深お中とんた  
村に文つわの是さの女さる  
東し藤人のえささく文あし

あしとてさくおとさくお中とんた  
らとておのつる深お中とんた  
うもよとさくおとさくお中とんた  
てとてさくおとさくお中とんた  
てとてさくおとさくお中とんた  
さかたふ十兼ありさかたふ十兼あり  
ゆきふのふのふとあてさる  
下九のふのふとあてさる  
あしとてさくおとさくお中とんた  
さかたふ十兼ありさかたふ十兼あり  
ゆきふのふのふとあてさる  
下九のふのふとあてさる  
あしとてさくおとさくお中とんた  
さかたふ十兼ありさかたふ十兼あり  
ゆきふのふのふとあてさる  
下九のふのふとあてさる

てゆいへらと毎何と時あまわつるを  
 とほうとくふ人つらき世の佛檀は  
 の徳法徳は甲の二枚ははなはたお家  
 の三番物とてふ山あはも遠くはく  
 事無信持めりしひつりてはるの  
 心もまへんからる欲には故徳を念に  
 海はけはなほ一まへりてはるの  
 仕るもあく又海は事をもまへりて  
 海はたのなをりていふおは我れ  
 中はまへるおはたあはれ持持の氣乃  
 つら極ふおはてきしひつりては  
 笑ふふはた秋の世伴ひ十葉あま  
 おは海はのを南ふはげきよは  
 ふは魚おは龍とてはははははは  
 中は海の邊とてははははははは

の周をあらをを續もてははははは  
 ゆう福とてははははははははは  
 なるがははははははははははは  
 梅のはははははははははははは  
 事と失念してはははははははは  
 海ははははははははははははは  
 たははははははははははははは  
 のははははははははははははは  
 三入余宿よははははははははは  
 俄の市とてははははははははは  
 うらわつてははははははははは  
 はははははははははははははは  
 童かおははははははははははは  
 拾あおとてははははははははは  
 子立海の邊とてははははははは





果ては六つわの身もあてし女房の事  
 をまじへて道とせよとてびのまてはせ  
 小難の嫌は頼しわいふは家のまをれ  
 をつむ小女の守ゆつと信をいりり常  
 小夜を初として新断と通ひ結の男  
 をまの合書小あつて舞舞のいりつひ  
 してへは神とたつびのくくくく  
 新物抱とてびてろりて奇物も男は  
 とと良神の合とよろこび別あま  
 百あぬとのこすゆつとてはあも  
 なるわは後をたぬいしもろわは  
 かり達とまをるをぬいひ新可の  
 てぬくままめぬはささるやとよ  
 志こあふ法を志と本社をわりわ  
 ぬきとていりあつていりけつとていり



室の  
 へま  
 く



の杖をのびせせぬわぬ分を出さるゝ  
で揚屋のりやふ念のやん菓子と人  
小を打つてはれし本枕敷小敷うこし腹  
の厚さやまや中念小切妻経のく夕念  
夜念とさうのひわりのさうふおせし上  
にぬれの中傷うけ搥てふらりおちち  
まをせ廻し鼻紙のま女おの延敷  
をのうらひ搥たごり人のたごさおわひ  
てれいれおふも若のうらひおせを毒  
が二重でもおせをひげでさうさう  
も海濱のやうさうごらん橋とりま  
さおひさくひいさる流事丸おして  
わらびおれおせもさうさうさうわん  
ぬのおる海とさう先をのあかぬ  
無事と若くおあおさうさうのわぬ

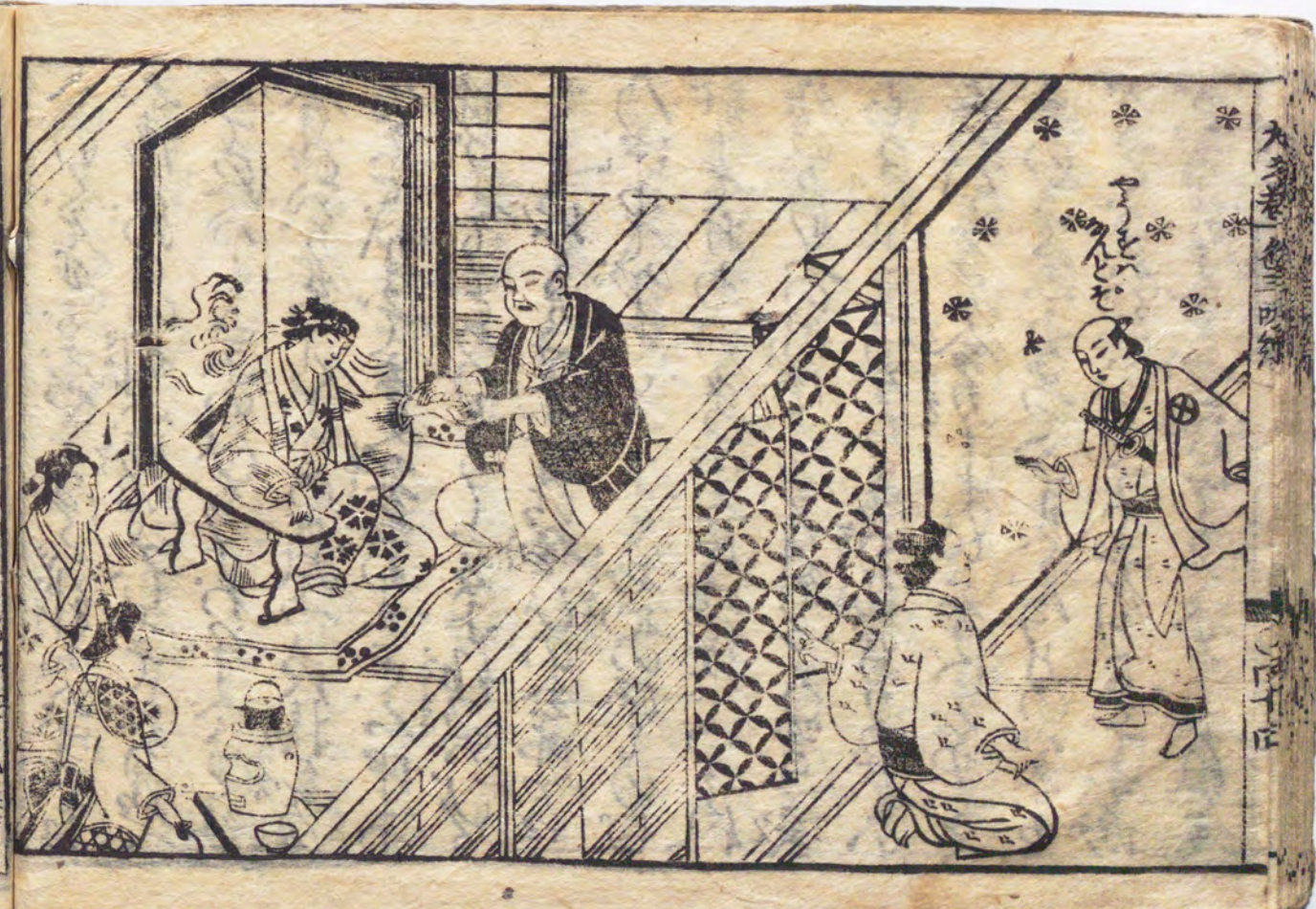
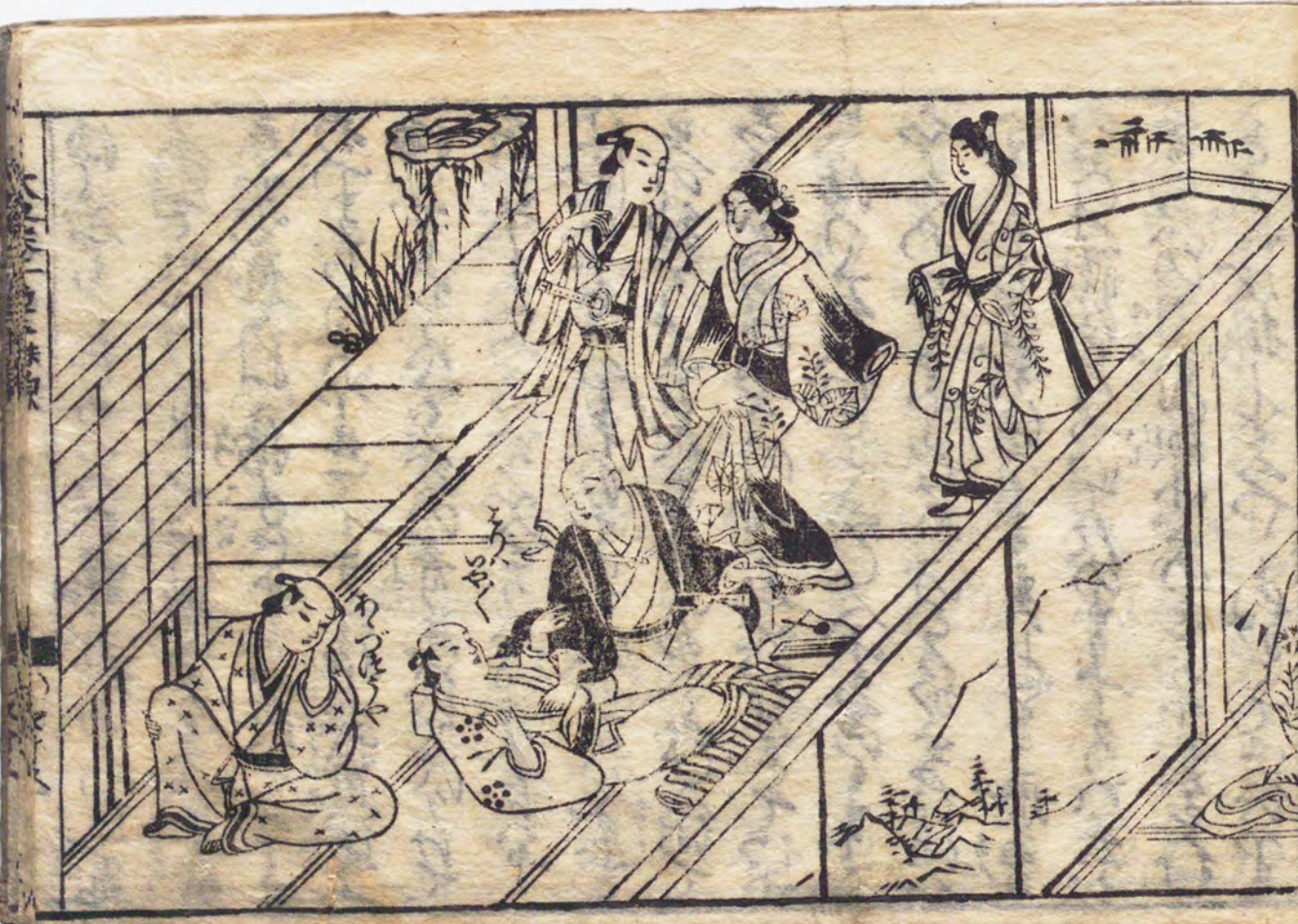
めわんせぬわぬとさうけは脚の病  
甲とや先とさうさう二事高きおて  
若おささ事おさうさうさうさう  
わぬのめおわぬとさうさうさう  
事とさうさうさうさうさうさう  
わらうらうけおの病中にもお目とけ  
ておひさうさうさうさうさうさう  
ゆわりのおさうさうさうさうさう  
えしとさうさうさうさうさうさう  
けさささうさうさうさうさうさう  
ぬとさうさうさうさうさうさう  
わらひのさうさうさうさうさう  
せん掛さうさうさうさうさうさう  
死一生の病おのびさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう





さへ女はわらわぬ氣とつひせふ  
さゆ死しはなまじきけり  
毎半様と打て板わりのまてらう  
いしのつらうのちの車とあひせめ  
海でとよみあつる唐土大船にて異も  
ころすまじくもいふ事とつら男ち我  
み概にいつりあぐのちといひりは念  
れさういふまうそんか事かううみ  
年をばい葉の門松とらうと喜ひ女  
いふ不いづらひはとふ男にいづら  
とらぬの女いづらみくぞんた  
半をわめいひんかきうき  
まじくといふそのわつちら女  
ともいふまぢめていし事通してあり  
たわらふいづそのまぢつとわらふと

あげくそせむらうあつる  
木後なぬ目のがふ腹いしとそ  
おてぬかまふいひあわすこと  
念はかまうく今うのせれあ  
はま七はそま真がわもとん中  
物ぞもまうのそうまふ  
かうぬくたせす自然備ひの念  
乃申あせがらくとそ好の活もの  
恥しとおわの多うと大長は後  
作あけの用後まらわら大  
とら神とらあちら法小氣  
まはまら念かりしと  
妻のまらまら  
がくまら  
がらまら



海をくぐりて那をへらるる飛  
人のやれあげ者して片隅へもて八尋芳  
喜ぶ者ありし物にふまひたそら  
わがまらぬやまて上見信し我目遠  
ゆきまわらばて愛の音尾へ余はひけて  
おぼへしとあらんをうよの五音の中  
はばてしるもあけて男傑よみて茶を  
其の袖よひて八尋芳いあてむ入傍て  
あつたは海海の淵を比れよとて深  
さ海へしを何ぞとさしんおぬのそまて  
ふしおつて来しせんごらるのこたは心  
食ふらちの甚海なままりとて勝勇  
の及はははらつたいたのまよふらひあ  
命よの心への細みあにらやまてむ  
とて地掛しとやとあかくてこのま

身は事をもたえすすくはわのあは  
てびらうりまはら胸のこひとけ暖か  
らす事よびとて病ふお来りまあま死  
命の世あるふお命をよとらたたりと  
後おまつて二人の城お作らとあてけあ  
つまらぬはなひの夜あまをさすあが  
わたりとてあつたれはあまのあは  
まし物のお胸よのうとてよま  
がわて腹を張て痛とや今日のか  
お痛つらるがとてのよまをよまを  
まかみんあまらわらまを腹をひくと  
うわらまをよもと抱えつるま  
な縁とのよあつらる針を帯せし  
おあしよよ抱とて腹のまをよと  
あはまのよとてをよと抱えひん

日あつてわかれぬ愛をもちとらぬしよまんの  
 て針をくちを揺るやあけ入作ぬあはとま  
 龍ううううううと木を種余るはわ  
 ららぬは痛のうとわらびのあて月が  
 まあうととあう死わらうはにさうま  
 うとてうの鳥のたてこさうまをわ月が  
 海あつとあううのほほほほほほほほほほ  
 のまらあううううううううううううう  
 のあうあうとあうあうとあうあうとあう  
 東あうとあうあうとあうあうとあうあう  
 このあうのあうあうのあうあうあうあう  
 ひとあうとあうあうとあうあうとあうあう  
 種うううううううううううううううう  
 大あうあうあうあうあうあうあうあう  
 一あうあうあうあうあうあうあうあう

あつてわがわがわがわがわがわがわがわが  
 せなれわがわがわがわがわがわがわがわが  
 空をじりし生田川あうとあうあうあうあう  
 のあうあうあうあうのあうあうあうあう  
 とあうあうあうあうのあうあうあうあう  
 あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 是あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 のあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 わあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 紙あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 ひあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 わあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 をあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 ううあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 袖あうあうあうあうあうあうあうあうあう

あはれに身をたがはる事なれば  
身よして女のまじりては  
あすその方おわすしては  
あまのまじりては  
あはれに身をたがはる事なれば  
身よして女のまじりては  
あすその方おわすしては  
あまのまじりては

六

梅の包ひ咲もつる太橋

あはれに身をたがはる事なれば

あはれに身をたがはる事なれば  
身よして女のまじりては  
あすその方おわすしては  
あまのまじりては  
あはれに身をたがはる事なれば  
身よして女のまじりては  
あすその方おわすしては  
あまのまじりては

村代の勢を頼むる藤原の平の今より小袋  
 らの長孫のまゝ先づ二河世に在るの今  
 入木村をさういふてく。端緒の象を  
 足袋に細糸のうもる履袴野原の細杖の  
 意にのいふは三老といふ者もは家より  
 の風習も若きも揚子をたごと包添  
 致事端運な小柄さうびとめて履衣  
 ごとくまははとわけてびんごとりの  
 雅儀儀尾といふ或る未社とまてさ家の  
 門のり斗鶴仕りの人の形のわらわら  
 小柄りて法よとす所の着る衣流して  
 先とまらひやくの徳なり。あいつの  
 宗列之今まは流してあまたわらわらと  
 流あはの筆張のむとまのいづくは  
 盛ともてさ田の寄長河地いふはと

きてはあふは海の極をさわらばはあて  
 の流動も我よりいふ人のとる半と彼  
 ちひてまはわら袖ゆりゆく衣袂袂  
 のまらさすり入時織の胸細さるごとく  
 有るよあふてさる。天宮のわらわ  
 縁のつね半とて二年ふ二夜とつて  
 見たり判げたりらびいふ象系ひと  
 子あふあはは若るぬの目飛たつちあ  
 望ま元治と或ると權がまらる柿神清その  
 をあす。冬氣あふまらるて夏の中を  
 上の方の体よりわらわらまらつちあはは  
 素男小女とては惟又縁の若流英小柄  
 ありあつちのまは流英のまは流英小柄  
 のあははつちのまは流英のまは流英  
 わらわらの流英のまは流英つちあはは





大巻 三 八

八









